

高等学校 芸術科（美術）学習指導案

指導者 森長 俊六

- 日時 平成29年7月5日（水） 第3限（10:40～11:30）
- 場所 美術教室
- 学年・組 高等学校I年 選択イ組（3・4組）13名（男子11名，女子2名）
- 題材 テラコッタでつくる空創動物
- 目標
1. 主体的に独創性のある生き物の構想を練る。
 2. 独創性のある生き物を創造する。
 3. 材料や技法の特性を理解して表現方法を工夫する。
 4. 作者の意図や表現の工夫を理解する。

指導計画（全11時間）

- 第一次 構想を練る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4時間
- ・参考作品の鑑賞，課題の理解(1)
 - ・アイデアスケッチ(2)
 - ・ワークシートの記入(1)
- 第二次 制作・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6時間
- ・粗造り(2)
 - ・細部の制作(2)
 - ・細部の仕上げ，くりぬき(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 本時1／2
- 第三次 鑑賞会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間（焼成後）

授業について

テラコッタとは、粘土を800度程度で焼成したものや、その粘土のことをいう。暖かみのある色合いなので、素焼きのままでも美しい素材である。また、釉薬を施して本焼きしても、趣のある作品として仕上げるができる。さらに、成形の過程では、可塑性に富む素材なので自由に形づくり、立体に仕上げるができる。それゆえ、二次元では味わえない存在感を味わわせることが可能である。一方で緻密な構造設計や重量計算が要求されるため形態の曖昧さは許されない。本題材名の「空創」は、より創造的な作品づくりを目指すというねらいを込めた造語である。

生徒は入学して最初の課題で「ひらがな動物園」*1に取り組んだ。これは描いた生き物とその生き物の名称を表すひらがなやカタカナで構成されていないといけないというものである。生き物の形態については図鑑などでしっかり観察・確認させることに重点を置いた。

本題材の現実に存在しない生き物については、アニメーションや映画の世界では見る機会があるが、自分で考え、つくり出すという経験はないといってもよいであろう。しかし、それらオリジナルの生き物は色々な面をよく考え工夫されており、その工夫に気づくことは創造力を育む第一歩であるといっても過言ではない。

制作に当たっては、単に突飛な形や思いつきの形態を考えさせるのではなく、生き物の特徴や形態が、天敵から身を守るためや生活環境に適應するための必然性から成り立っていることなどに注目させるとともに、鱗や皮膚、爪などの質感の違いを粘土という単一な素材で表現するという点についても工夫させたい。

* 1 参考：森長俊六「「うわあー」「ふうむ」でいきいき授業」『美育文化』2001, Vol. 51, pp. 50-51

準備物

教師：参考作品，各種図鑑，ワークシート，粘土（1人2kg），粘土板，粘土ベラ，かき出しベラ，ドベ，木片やコンクリート片，ナイロン袋，輪ゴム，直径30cmのリング，電子黒板，大型テレビ，書画カメラ，PC，タブレット端末

生徒：教科書，クロッキー帳，図鑑・電子辞書等，エプロン

本時の指導目標

1. 材料の特性を理解して細部の表現方法を工夫する。

本時の評価規準（観点／方法）

1. 主体的に創造的な生き物を制作している。（美術への関心・意欲・態度／制作態度）
2. 材料の特性を理解して表現方法を工夫する。（創造的な技能／作品）

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
（導入） 計画性	○本時の見通しを持つ。 （完成までの見通しを持つ） ・細部を仕上げて表面を完成させる。 ・作品の中の粘土をかき出して中を空洞にする。 ・最終的に形を整える。	○生き生きとした作品が完成するよう意欲を高めさせる。 ・ひび割れや脱落がある場合の修整方法を確認する。 ・表面の仕上げ→くりぬき→表面の仕上げ。 ○その生き物らしい表現を探究させる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">細部を仕上げて完成させよう！</div>		
（展開） 仕上げの工夫 試行錯誤	○細部を仕上げる。 ・体表の質感を表現する。 鱗・毛・皮・羽ね・爪・くちばしなどの部位に応じて粘土ベラなどを使って表現を工夫する。 ○かき出しベラを使って内部をくりぬく。 ○形を整えて仕上げる。	○質感の違いをどのように表現すると効果的か考えさせる。 ・机間指導の中で生徒の工夫を取り上げ全体に紹介する。場合によっては演示してみせる。 ○頭部など，かき出しにくい部分は無理をしない。（頭部がピンポン球程度であれば空洞にする必要はない） ・必要に応じて演示してみせる。 ○30cmのリング内に収まることを確認する。
（まとめ） 片付け 整理整頓 振り返り	○片付ける。 ・完成したら，ナイロン袋不要のまま陶芸庫へしまう。 ・ヘラなどをよく洗い，机や床の掃除をする。	○自重で倒れ落ちそうな部分は，余り粘土を当てておく。 （つかい棒→つかい粘土）

空創動物図鑑

組 番 名前

名前

特徴, 好物, 住んでいる場所, 大きさ, 天敵など

形態

--

実践上の留意点

1. 授業説明

構想段階では、ただ自由に構想しなさいと言っても皆がすぐ発想できるものではない。したがって、体長・住んでいる場所・天敵・好物など、その生き物の生態をしっかりと想定させることから始めた。そうすることによって徐々に形を浮かび上がらせることができた。

表面仕上げ（鱗・毛・爪など）の方法については、教師が説明する前に、生徒の工夫を取り上げ、皆に紹介することで、さらに生徒それぞれの工夫を引き出す方が効果的であると考えた。

生徒の工夫や教師の示範については、書画カメラを使って道具や手元を拡大して見せたり、教卓の周りに生徒を集めて説明するなど、内容に応じて使い分ける。その他、iPad のカメラ機能を使って、Apple TV で大型テレビに映せば、生徒の作品を書画カメラまで移動したり、他の生徒を集めることなく紹介できる。

前回（1週間前）の授業後、作品はナイロン袋で覆って保管していたが、思いのほか乾燥が進んだ。少し位は硬めの方が「かき出し」には都合がよいが、少し硬くなりすぎていた。本来なら集中的に仕上げたいところだが、2時間続きの授業で週1回となれば、やむを得ない。密閉式の衣装ケースに保管したり、途中で霧吹きをするなどの工夫も必要である。

2. 研究協議より

「空創動物図鑑」というワークシート名が、書き込もうとする意欲をかき立てる名前だと感じた。また、みる側も、より興味をもってみることができそうだ。

「空創動物」を題材に、高校生が思いもかけない空想の生物をつくり出している様子が印象的だった。

特徴や住んでいる場所などを考えて、その条件に合わせて動物を生み出すこと、立体作品として仕上げなければならない、といった制約が逆に高校生の発想力をより高めさせていることが分かった。

（自由で突飛な発想は小学生は得意だと思うが、高校生は発想自体に意味や論理を求める傾向にあるだろうから制約を設けることはより豊かな発想を促しているのだと感じた。）

皆が自分の作品に集中している様子が見られた。「空創動物図鑑」というワークシートを使って、動物の名前、特徴、形態を記入させることで、自分の空創するものを具体化させる。これは単に突飛な形や思いつきの形態を制作してしまうのを防ぐためであり、現実の生き物の特徴や形態にあらためて目を向けさせ、他教科との関連性も十分配慮されている授業であると感じた。

少人数で、生徒たちが落ち着いた雰囲気でも熱心に取り組んでいて、いいなと思いました。くちばしの形をするどくするために、先生が生徒たちを集めて、へらを使って見事に鋭い形にして見せたのも、技と思いました。生徒たちの頭のなかは、ずっとアクティブだったと思います。